

摂食障害における思考過程に関する対象関係論的理解と介入：「原初的なわかること」の困難さとその必要性

石橋，大樹

<https://hdl.handle.net/2324/2236002>

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（心理学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	石橋 大樹			
論文名	摂食障害における思考過程に関する対象関係論的理解と介入 —「原初的なわかること」の困難さとその必要性—			
論文調査委員	主査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	黒木俊秀
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	吉良安之
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	准教授	金子周平
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	大場信恵

論文審査の結果の要旨

本論文は、複数のクライアントとの面接過程の検討を通して、治療が困難とされる重篤な神経性やせ症（摂食障害）のクライアントに対する精神分析的な実践的なアプローチの工夫として「原初的なわかること」に注目する意義について、主として対象関係論の立場から考察を行ったものである。

第1部では、重篤な摂食障害への対象関係論的なアプローチについての概念の整理と問題提起を行った。Freud から現代の Klein 派における身体の位置づけと、身体と心の関連について概念を整理した後、Bion のコンテイングや K-link の概念を発展させて、石橋氏は「わかること」よりもさらに原初的な水準にある「原初的なわかること」という概念を新たに提唱した。「原初的なわかること」とは、①対象と接触し、②受動的に与えられた良いものを取り入れながら、③対象を「良い—悪い」の性質で仕分けすることが可能となり、④さらに良い対象の取り入れを通して、コンテナを成長に向かわせる思考の原初的な段階と定義され、重篤な摂食障害事例は、「原初的なわかること」の困難さによって、心身に良いものを摂取する、すなわち、「食べること」が困難な状態になっていると仮定した。

第2部では、重篤な摂食障害事例における「原初的なわかること」を促進させるために必要な精神分析的治療設定と、そのクライアントの行動化との関連について「薄皮の自己愛」及び「薄皮の（心的）皮膚」という視点から検討を行った。さらに第3部では、コンテナとして常に安定した精神分析的治療設定においてはじめて可能となる重篤な摂食障害のクライアントとセラピストの交流を通して、「原初的なわかること」の変化についてクライアント、セラピスト双方の視点から検討した。

最後に第7章において、本研究の対象とした7名の重篤な摂食障害事例の治療経過を総合的に考察した結果、「原初的なわかること」という視点が、「良い—悪い」の対象を区別できず、ことごとく対象を拒絶し、些細な心理的介入や心の変化に対しても強い怖れを抱いてしまう「薄皮の自己愛」を抱くクライアントに対して、セラピストが不安を和らげる解釈を行うことを可能にすると示唆された。

以上のように本研究は、重症摂食障害事例に対する精神分析的治療に基づく臨床研究であり、その方法論的妥当性にはなお限界を認めるものの、その知見は最近の精神分析学で注目されるメンタライゼーション理論とも近似しており、摂食障害への心理的支援の実践に有用な理論を提唱している点において臨床心理学的意義が大きい。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。